

# 日本舞踊の”狂い”動作が鑑賞者に与える心理効果の 定量的分析

雑賀玲衣<sup>†1</sup> 松居辰則<sup>†2</sup>

**概要**：本研究では日本舞踊演目『鶯娘』を取り上げ、熟達者へのインタビューから選定した「身体のある特定の部分を強調する動作」「柔軟性を示す動作」「高速回転」「上下への不規則的で急速的な切り替え動作」の4種類の“狂い”動作が鑑賞者にどのような心理効果を及ぼすかを定量的に分析した。結果、共感性高低により“狂い”動作への印象評価が変化することがわかった。

**キーワード**：日本舞踊，印象評価，共感性

## Quantitative Analysis of Psychological Effects on “KURUI” Movement in Japanese Traditional Dance.

REI SAIKA<sup>†1</sup> TATSUNORI MATSUI<sup>†2</sup>

**Abstract**: The purpose of this study is a quantitative analysis of psychological effects on “Kurui”, a form of Japanese traditional dance. We selected the four types of “Kurui” from expert’s interviews and carried out a comparison study on evaluation of impressions for the four types from empathy point of view. As a result, there was a difference in evaluation of impression evaluation for “Kurui” between the high empathies group and the low empathies group.

**Keywords**: Japanese traditional dance, image evaluation, sympathy

### 1. 背景

#### 1.1 日本舞踊における“狂い”

舞踊は身体運動から生み出される芸術である。その身体運動に内包される意味を鑑賞者は読み取ったり、感じ取ったりすることができる[1]。舞踊の中でも特に様式性の高い日本舞踊は、ひとつの作品の中に多くの「振り」が利用されており、それぞれの振りは、幾種類かの姿勢や動きの単位の組み合わせである型から出来ている[2]。

日本舞踊の内容的分類としては「所作事」「石橋物」「変化物」などがある。一人の踊り手が早変わりして次々と異なる役柄に扮して踊る「変化物」の代表的作品として『鶯娘』が挙げられる。『鶯娘』は鶯の精である鶯娘が白無垢姿で佇むシーンから始まる。その後、鶯娘は町娘へと姿を変えて華やかな恋心を表現していく。しかし恋に迷った鶯娘は夜叉へと姿を変えて苦悩する様を見せ、やがて息絶えて終幕する。鶯娘が夜叉へと姿を変えて苦悩するシーンには”狂い”の型が使われている。“狂い”の型とは、女性の狂おしい恋心のイメージを獅子の舞に重ね合わせた「石橋物」に多用される型であり、長い髪を左右に振り回す「髪洗い」などを初めとする、動作としては可能であるが動作様式としては見慣れない動きのことを示す。

#### 1.2 予測困難動作

他者の動作知覚においてその動作の視覚的経験、及び自分がその動作を行ったという行為経験がどのように寄与するのかを、他者の動作は自己の動作の媒介として理解されるというミラーシステム理論[4]の観点から考えれば、他者の動作の理解のためにはその動作の視覚的経験や行為経験は必要不可欠なものであると予測できる[3]。この考えをもとに、高橋ら[3]は通常歩行と伝統舞踊の能楽で行われるハコビ歩行のバイオロジカルモーションを用いて歩行の方向判断について検討を行った。結果、ハコビ歩行の進行方向判断が通常歩行に比べて困難であったことが示され、後続動作判断が困難である理由としてハコビ歩行が動作としては可能なものであるが、動作様式としては見慣れない、かつ行い慣れていない新規のものであることを挙げている。

これまで日本舞踊を対象とした研究には、舞踊の振りのひとつである「オクリ」の特質を計量化したものや[5]、舞踊の印象を決定する時性、空間態性、力性と感情を表す形容詞や形容動詞との関連を示したもの[6]などがあるが、舞踊の型でも特に”狂い”に着目した研究は見当たらない。ハコビ歩行が動作としては可能なものであるが、動作様式としては見慣れない、かつ行い慣れていない新規のものであることが後続動作判断の困難に影響したとする高橋ら[3]の研究を踏まえれば、動作としては可能なものであるが、動作様式としては見慣れない、かつ行い慣れていない”狂い”の型は、鑑賞者に後続動作判断の困難を生じさせ、それが狂気や恐怖の喚起に効果的であると考察される。

<sup>†1</sup> 早稲田大学人間科学研究科  
Graduate School of Human Sciences, Waseda University

<sup>†2</sup> 早稲田大学人間科学学術院  
Faculty of Human Sciences, Waseda University

### 1.3 共感性

感動には受け手側の感情移入又は共感が必要である。感動・歓喜は事象の受容が重要であり、その意味で他者理解と類似している[7]。Davis[8]は共感性を多次的に捉え分類した。多次元共感性とは、以下の4つである。

- 「共感的配慮 (EC ; EmpathicConcern)」
- 「個人的苦痛 (PD ; PersonalDistress)」
- 「視点獲得 (PT ; PerspectiveTaking)」
- 「想像性 (FS ; Fantasy)」

共感的配慮 (EC) は、「不幸な他人に対して同情やあわれみの感情を経験する傾向」、個人的苦痛 (PD) は、「他人の大変な苦痛に反応して、こちらが苦痛や不快を経験する傾向」、視点獲得 (PT) は、「日常生活で自発的に他人の心理的立場をとろうとすることについての報告された傾向」、想像性 (FS) は、「想像上で自分を架空の状況の中に移し込む傾向」とされている。想像性は同情喚起フィルムを見たときの悲しみを示す形容詞、苦痛喚起フィルムを見たときの苦痛を示す形容詞への反応強度と正の相関があり、それらの相関は皮膚伝導度でも測定されている[9]。

本研究では日本舞踊演目『鶯娘』を取り上げ、“狂い”動作の視聴が鑑賞者に与える心理効果を、鑑賞者の共感性傾向を踏まえた上で定量的に分析することを目的とした。動作としては可能であるが動作様式としては見慣れない“狂い”の動作に直面した際の鑑賞者の情動反応とその動作に対する印象評価を関連付けることで“狂い”のもたらす心理効果を客観的に検出することが可能であると考えられる。

## 2. 方法

### 2.1 “狂い”動作の選定

『鶯娘』映像より“狂い”を効果的に表現していると思われる動作を選定した。『鶯娘』映像は坂東玉三郎舞踊集2『鶯娘』(松竹株式会社)を用いた。“狂い”動作選定においては舞踊歴60年を超える藤村流の舞踊家女性1名に協力いただいた。その中で日本舞踊における“狂い”とは激しく日本舞踊において激しい情動を表出する動作「多くの場合、人ではないものへの変容過程を兼ねている」との発言を受け、本研究においては“狂い”を「激しく日本舞踊において激しい情動を表出する動作を示し、多くの場合、人ではないものへの変容過程を兼ねている」と定義した。その上で、『鶯娘』映像を共に鑑賞し、激しい情動を表出する動作である“狂い”の表現として効果的と思われる動作をリアルタイムで報告してもらった。

結果、以下4種類の動作が“狂い”の表現動作として効果的であるとされた。

- 身体のある特定の部分を強調する動作(頭の高さを変えずに移動するハコビ歩行など)
- 柔軟性を示す動作(エビ反りなど)
- 高速回転
- 上下への不規則的で急速的な切り替え動作

本研究では『鶯娘』において上記4種類の動作に該当する場面を抽出し、“狂い”動作として選定した。

#### 動作 1

身体のある特定の部分を強調する動作

#### 動作 2

柔軟性を示す動作

#### 動作 3

高速回転

#### 動作 4

上下への不規則的で急速的な切り替え動作

### 2.2 “狂い”が与える心理効果の測定

#### (1) 実験協力者

実験協力者は日本舞踊およびその他の舞踊経験がない6名(男性3名、女性3名)であった。

#### (2) 印象評価

選定した“狂い”表現動作4種類それぞれについての印象を測定するため、舞踊運動評価尺度[h]を用いた。舞踊運動評価尺度[d]は5段階評定17項目の形容詞対から成る評価尺度であるが、“狂い”動作を明確に分類し“狂い”動作の定義をすると意図のもと本研究においては形容詞対17項目をそれぞれ独立した項目として、34項目の測定を行った。回答は各項目について「とてもよくあてはまる(4点)」から「まったくあてはまらない(1点)」の4段階評定で求めた。映像刺激の再生は実験協力者任意のタイミングで行われ、映像刺激鑑賞中は実験者の姿が実験協力者の目に入らないよう実験者と実験協力者の間に仕切を設置した。

#### (3) 共感性

多元的共感性尺度[10]24項目を使用した。回答は各項目について「とてもよくあてはまる(4点)」から「まったくあてはまらない(1点)」の4段階評定で求めた。

#### (4) 皮膚コンダクタンス反応

情動反応を客観的に測定する為の生理指標として皮膚コンダクタンス (Skin Conductance : 以下, SC) を測定した。『鶯娘』の“狂い”場面である約10分間の映像を視聴中のSCを測定した。実験プロトコルは、実験協力者に計測器を装着後、椅子に座った状態で2分間軽く目を閉じ安静を保させ、パラメーターが安定したのを確認してから計測を開始した。映像の再生は実験協力者任意のタイミングで行われ、映像刺激鑑賞中は計測する実験者の姿が実験協力者の目に入らないよう実験者と実験協力者の間に仕切を設置した。

### 3. 結果

#### 3.1 印象評価と共感性

共感性傾向による“狂い”動作への印象評価の差異を検討するため、多元的共感性の「想像性」得点を平均値で分割し、高共感性郡（4名，うち女性1名）と低共感性郡（2名，うち女性2名）の2郡を作成した。高共感性郡と低共感性郡の間において，“狂い”動作4種類それぞれに対する印象評価得点に  $t$  検定を実施した。

結果，動作1では「静的」( $t(4) = -3.77, p < .05$ ) について低共感性郡よりも高共感性郡の方が有意に高く評価をしていた(図1参照)．動作2では有意差は認められなかった(図2参照)．動作3では「規則正しい」( $t(4) = 3.13, p < .05$ )，「バランスのとれた」( $t(4) = 5.77, p < .05$ ) について高共感性郡よりも低共感性郡の方が，「アンバランスな」( $t(4) = -6.00, p < .05$ ) について低共感性郡よりも高共感性郡の方が有意に高く評価をしていた(図3参照)．動作4では有意差は認められなかった(図4参照)．

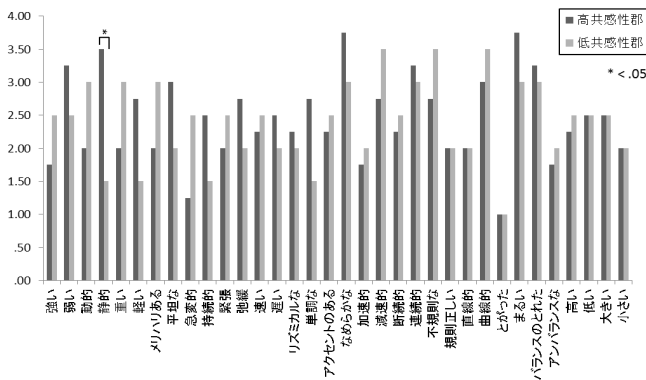


図1 動作1における印象評価の共感性高低

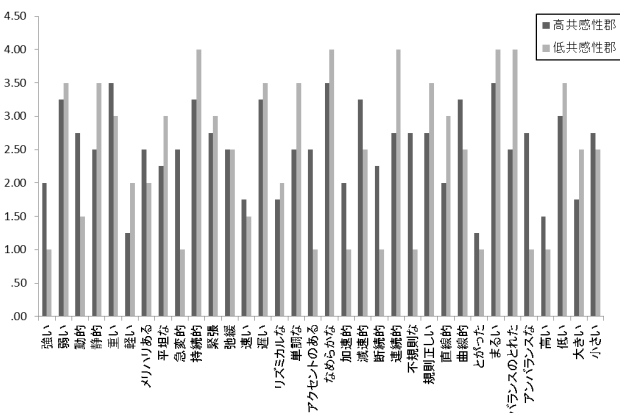


図2 動作2における印象評価の共感性高低

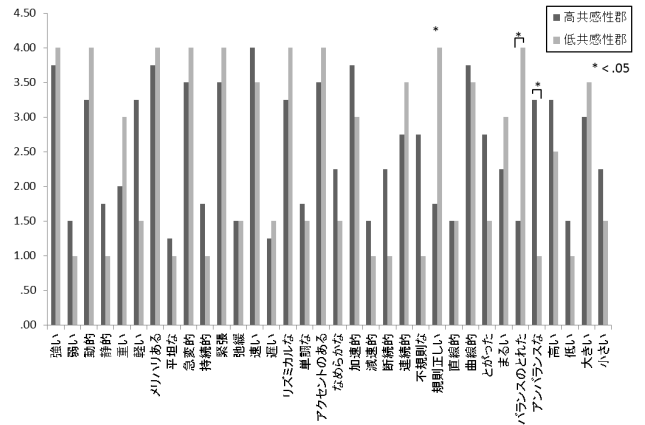


図3 動作3における印象評価の共感性高低

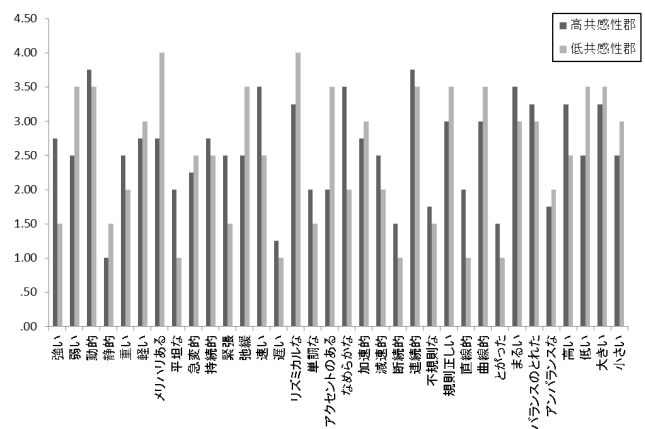


図4 動作4における印象評価の共感性高低

#### 4. 今後の展望

本研究では日本舞踊演目『鶯娘』を取り上げ，“狂い”動作の視聴が鑑賞者に与える心理効果を，鑑賞者の共感性傾向を踏まえた上で定量的に分析することを目的とした。結果，共感性高低により“狂い”動作への印象評価が変化することがわかった。共感性の下位因子である「想像性」は同情喚起フィルムを見たときの悲しみを示す形容詞，苦痛喚起フィルムを見たときの苦痛を示す形容詞への反応強度への皮膚伝導度と正の相関があることも証明されており[8]，今後は生理指標も踏まえて“狂い”動作の心理的效果を定量化していく必要があるだろう。“狂い”場面視聴中の生理指標として SC は既に計測済みである。“狂い”の動作に直面した際の鑑賞者の情動反応としての SC とその動作に対する印象評価を関連付けることで“狂い”のもたらす心理効果を客観的に分析していくことが今後の課題である。

謝辞 藤村流家元藤村鶴知枝女史はじめご協力頂いた皆様に，謹んで感謝の意を表する。

## 参考文献

- [1] 鹿内菜穂・八村広三郎・澤田美砂子 (2011). 舞踊の感情表現における感性情報の評価—ビデオ映像と点光源映像を用いた主観的評価実験— 研究報告 人文科学とコンピューター, **92**, 2, 1-8.
- [2] 東京国立文化財 (1960). 標準日本舞踊譜 創芸社
- [3] 高橋康介・福田玄明・池田華子・土屋裕和・渡邊克巳・上田一博・篠原一之 (2011). 通常歩行とハコビ歩行の方向判断方略—バイオロジカルモーション刺激を用いた検討— 電子情報通信学会技術研究報告 MVE, マルチメディア・仮想環境基礎, **110**, 457, 9-14.
- [4] G. Rizzolatti (2005). The mirror neuron system and its function in humans, *Anat Embrol*, **210**, 419-421.
- [5] 吉村ミツ・八村広三郎・丸茂祐佳 (2005). 舞踊動作を表す特徴についての検討 情報処理学会研究報告 人文科学とコンピュータ研究会報告, **10**, 17-24.
- [6] 松本千代栄 (1987). 舞踊研究; 課題設定と課題月学習Ⅱ—運動の質と感情評価 日本女子体育連盟紀要, **87**, 1, 53-89.
- [7] 戸梶 亜紀彦(2004)『感動』体験の効果について—一人が変化するメカニズム—, 広島大学マネジメント研究, No. 4, pp. 27-37.
- [8] Davis, M.H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal Of Personality and Social Psychology*, **44**, 1 113-126.
- [9] Eisenberg, N., McCreath, H., & Ahn, R. (1988). Vicarious emotional responsiveness and prosocial behavior: Their interrelations in young children. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **14**, 298-311.
- [10] 鈴木有美・木野和代(2008). 多次元共感性尺度(MES)の作成 : 自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて 教育心理学研究 **56**(4), 487-497.